

# 稲の掛干しの起源についての基礎的考察

## Studies on Drying Rice Plants

河野通明

- ①はじめに
- ②承和8年稲架干し奨励官符の基礎的検討
- ③稲城の再検討
- ④結語

### 【論文要旨】

本稿は、研究の手薄な刈り取り後の稲の乾燥方式について古代の文献史料から以下の2点を論証した。

(1) 841年(承和8)の太政官符は、これまで刈り取った稲を田の面に並べて干す「地干し」から、田の中に木の欄を作って掛けて干す「掛干し」への転換と考えられてきたが、実は農家の中庭に置いて干していたのを刈り跡の田の中に木を構えて干すよう奨励したものであること、言い換えれば「庭干しから田干しへ」という変化を含むものであることを明らかにした。庭干し方式はアジアの古い稲作の形態と考えられるが、この太政官符は弥生時代以来の伝統を変える重要な技術革新であり、平安時代に進行する稲作技術の日本化の一環として位置づけられること、それは民間から起こったもので、その担い手は有力百姓層と考えられることを論証した。

(2) また「庭干しから田干しへ」の変化は「穂刈りから根刈りへ」の動きに対応するもので、嵩の高い根刈り稲は狭い農家の中庭では重ね積みせねばならず、その乾きにくさが広く風通しのよい田中での掛干しを考え出すものになったと考えられ、掛干し奨励官符も「穂刈りから根刈りへ」の研究史料となりうるものであることを論証した。

(3) 『古事記』や『日本書紀』には「稲城」というバリケードを作って防戦するという記載が見られる。この稲城はこれまで稲の掛干し用の稲木と似たものと解釈されてきた。本稿では史料を詳しく検討し、稲城とは敵の矢を防ぐため穂刈りの稲を断面台形に人の肩の高さまで積み上げた厚みのあるバリケードで、稲の乾燥用の稲木とは全くの別物であること、建物の周囲を稲城でめぐらすには相当量の穂刈りの稲が必要であり、当時の有力者の館の倉庫には大量の穂刈りの稲が保管されていたことを明らかにした。ここから考えて古墳時代の稲の収穫は、弥生時代以来の「穂刈り」が主流であり、鎌で稲の根から刈り取る「根刈り」はほとんど行われていなかったと考えられる。